成人前期の女子大学卒業生における自尊感情の規定要因

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>西村 純一</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>東京家政大学研究紀要 人文社会科学</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2013年</td>
</tr>
<tr>
<td>出版者</td>
<td>東京家政大学</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://id.nii.ac.jp/1653/00009319/">http://id.nii.ac.jp/1653/00009319/</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
成人前期の女子大学卒業生における自尊感情の規定要因

西村 純一
（平成24年12月20日査読受理）

Determinants of self-esteem among graduates of women’s universities in the early stage of adulthood

NISHIMURA, Junichi
(Received for publication 20 December 2012)

キーワード：自尊感情、成人前期、女子大学卒業生、規定要因、重回帰分析、キャリア支援
Key words: self-esteem, early stage of adulthood, graduates of women’s universities, determinants, multiple regression analysis, career support

問題

セルフ・エスティーム（self-esteem）の定義は、必ずしも統一されているわけではない。ここでは、Guindon（2002）による「セルフ・エスティームとは、自己の態度的、評価的構成要素である、すなわち、外界から能力を認められたりフィードバックをもらったりした結果、培われ、維持されてきたもので、価値があり、受け入れられているという感情から構成されている自己概念に対して下される情動的判断である」を採用する。また、セルフ・エスティームの訳語も必ずしも統一されておらず、「自尊心」「自尊感情」「自己評価」などの用語が使われているが、ここでは自尊感情と訳すこととする。これまでに、自尊感情に関する多くの研究が、自尊感情はやる気に関し、人生の満足度に影響し、生涯を通じての幸福に大きく関係していることを示している。そうした意味で、本研究では、生涯にわたる女子大学卒業者のキャリア支援を考慮上で、自尊感情の変化やその規定要因についての研究が必要になると考えている。ここに、女性のキャリア形成に不安定な20代から30代へかけての移行期の自尊感情の変化、そしてその変化に対してどのような要因が影響を及ぼしているかを探することはきわめて重要である。

若い女性は、この時期、人生の役割やライフイベントにおいて大きな変化を経験する。よく七五三現象といわれるが、東京家政大学自己分析研究会（2012）の調査結果によると、初職就続率は22～25歳では78.4％であるが、20代後半では44.2％、30代前半では26.3％、30代後半では20.4％と低下した。それと照らして転職率は22～25歳では17.0％であるが、20代後半では41.3％、30代前半では45.6％、30代後半では45.5％と増加した。また、離職率も22～25歳では4.6％であるが、20代後半では14.5％、30代前半では28.1％、30代後半では34.1％と増加した。この背景には、若い女性の結婚、出産、子育てなどのライフイベントが考えられる。本研究では、これらを含めて若い女性をめぐる様々なライフイベントもしくはストレスが女性の自尊感情にどのような影響を及ぼしているか検討する。

若い男性は自立して主的に行動したいという欲求が原油力になる傾向があるのに対して、若い女性は、他者とのつながりを求める欲求が原油力になる傾向があり、そこに若い女性の大きな特徴の一つがあると考えられる（Gorbett & Kruczek, 2008; Josephs, Murkus, & Tiarodi, 1992; Josephs, Murkus, & Tiarodi, 1992）と示す。自尊感情の高い女性は、自尊感情の低い女性よりも他者との連帯感や相互依存関係が強い。若い女性の場合には、自尊感情は「仕事うまくいくな」ことや「価値ある人間になること」だけではなく、「人間関係を育み、維持すること」に影響を受ける可能性があると考えられる。若い女性の場合には、他者から承認されて他、ネガティブなフィードバックを受けると、自尊感情が低くなり、既存のネガティブな自尊感情が強化される可能性があるとみられる。本研究では、このような観点から、若い女性をサポートしているとみられる様々な人間関係がその自尊感情とどのように関係しているか検討する。

このほか、自分の生きがいとなっている活動、自分の性格特性をどのようにみているか、人生の決定因についての考え方、人生を生き抜く上で大切な人間力はどうみているか、なども併せて、様々な角度から若い女性の自尊感情の規定要因を検討する。また、人は30歳前後、そして40～45歳前後への転換期に再度人生を見直し、自分に適したなかった、もしくは適したなかった構造の改変に取り組むようになるといわれる（Levinson, 1978）。そこで、30歳前とそれ以降の世代に分けて、自尊感情の規定要因がどの
表1 卒業年次別・年代層サンプリング

<table>
<thead>
<tr>
<th>年次</th>
<th>バサラ</th>
<th>年次</th>
<th>バサラ</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>平成5</td>
<td>6年</td>
<td>7年</td>
<td>16年</td>
<td>7年</td>
</tr>
<tr>
<td>平成6</td>
<td>7年</td>
<td>8年</td>
<td>9年</td>
<td>10年</td>
</tr>
<tr>
<td>平成7</td>
<td>5年</td>
<td>6年</td>
<td>7年</td>
<td>8年</td>
</tr>
<tr>
<td>平成8</td>
<td>5年</td>
<td>6年</td>
<td>7年</td>
<td>8年</td>
</tr>
<tr>
<td>平成9</td>
<td>5年</td>
<td>6年</td>
<td>7年</td>
<td>8年</td>
</tr>
<tr>
<td>平成10</td>
<td>5年</td>
<td>6年</td>
<td>7年</td>
<td>8年</td>
</tr>
<tr>
<td>平成11</td>
<td>5年</td>
<td>6年</td>
<td>7年</td>
<td>8年</td>
</tr>
<tr>
<td>平成12</td>
<td>5年</td>
<td>6年</td>
<td>7年</td>
<td>8年</td>
</tr>
<tr>
<td>平成13</td>
<td>5年</td>
<td>6年</td>
<td>7年</td>
<td>8年</td>
</tr>
<tr>
<td>平成14</td>
<td>5年</td>
<td>6年</td>
<td>7年</td>
<td>8年</td>
</tr>
<tr>
<td>平成15</td>
<td>5年</td>
<td>6年</td>
<td>7年</td>
<td>8年</td>
</tr>
<tr>
<td>平成16</td>
<td>5年</td>
<td>6年</td>
<td>7年</td>
<td>8年</td>
</tr>
<tr>
<td>平成17</td>
<td>5年</td>
<td>6年</td>
<td>7年</td>
<td>8年</td>
</tr>
<tr>
<td>平成18</td>
<td>5年</td>
<td>6年</td>
<td>7年</td>
<td>8年</td>
</tr>
<tr>
<td>平成19</td>
<td>5年</td>
<td>6年</td>
<td>7年</td>
<td>8年</td>
</tr>
<tr>
<td>平成20</td>
<td>5年</td>
<td>6年</td>
<td>7年</td>
<td>8年</td>
</tr>
<tr>
<td>平成21</td>
<td>5年</td>
<td>6年</td>
<td>7年</td>
<td>8年</td>
</tr>
<tr>
<td>平成22</td>
<td>5年</td>
<td>6年</td>
<td>7年</td>
<td>8年</td>
</tr>
</tbody>
</table>

合計 5,000人

調査内容 「女子大卒業者のライフキャリアに関する意識調査」の調査票のなかから本研究に関係する調査項目を、調査票の流れに沿って示す。質問の詳細や調査票の全体について、東京女子大学自己分析研究会（2012）を参照された。

- 年齢（歳）
- 現在の結婚状況（未婚・既婚）
- 子どもの有無
- 親との関係
- 初職の履歴
- 現在の仕事の有無

西村 純一
調査手続き 前述の調査対象者の選定条件のもととして無作為に抽出し、郵送調査を実施した。2011年3月10日に調査票を発送した。調査の締切日は1ヶ月後の4月10日に設定したが、3月11日に東日本大震災があり、締切日を5月末まで延期した。有効回答数は1,255であった。無効回答や調査に対する苦情はなかった。調査開始から1週間以内に移転先不明の東日本大震災の影響などにより宛先不明として74通が戻ってきた。そのため、これらを差し引くと有効回答率は25.4％（1255/4926）であった。なお、有効回答数の年代別内訳は、22〜25歳は285（22.7％）、26〜29歳は245（19.5％）、30〜34歳は332（26.5％）、35〜39歳は399（31.3％）であった。

データの分析手順 自尊感情尺度の項目について主因分析により2因子抽出し、パリマックス回転を行った。また、30歳未満と30歳以上に分け、第1因子と第2因子の因子得点をそれぞれ従属変数とし、年齢、現在の結婚状況（未婚・既婚）、子どもの有無、親との別居状況、初職の正規雇用・非正規雇用の別、現在の仕事の有無、離職の経験（初職継続・初職非継続）、これまでの強いストレス体験（その他除く17項目）、精神的につらいときさされた人（その他除く16項目）、生きがいを与えてくれた活動（その他除く12項目）、自己の性格特性（その他除く15項目）、人生の決定要因（4項目）、人生を生き抜く上で大切な人間力（その他除く23項目）を独立変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。以上の分析には、PASW Statistics ver. 17.0を使用した。

結果と考察 自尊感情尺度の因子構造 これまで行われたローゼンバーグの尺度に関する因子分析の結果によると、概ね2因子が抽出されてきた。Kaplan & Pokorny（1969）では、第1因子は自己価値の習慣的防衛の因子、第2因子は一般的な自己概念に対する強い肯定的な感情の因子と名付けられた。Carminees & Ziller（1979）では、第1因子を構成する項目は肯定的な方向で述べられているため積極的自尊感情の因子、第2因子は肯定的な方向で述べられているため消極的自尊感情の因子と命名している。

今回の分析に当てては、得点の高いほど肯定的な意味になるように値の再割り当てを行った。結果（表2）をみると、第1因子は「良い素質をもっている」「人並みに価値ある人間である」「自分に満足している」などの肯定的な方向で述べられている項目に負荷が高く、第2因子は「全くない人間だと思うことがある」「役に立たない人間だと思う」「敬意を払うことができない人」などの否定的な項目に負荷が高く、この結果はCarmines & Ziller（1979）の結果に類似していると考えられるため、第1因子を自己に対する肯定的自尊感情をもつという意味で積極的自尊感情の因子、第2因子を消極的自尊感情の因子と名付けることにした。なお、消極的自尊感情はややわかりにくいが、自己に対し肯定的な方向で述べている結果を示すという意味であり、その意味ではKaplan & Pokorny（1969）の自己価値の習慣的防衛的因子に近いかかもしれない。

なお「自分には自慢できるところはあまりない」は逆転項目で否定的な方向で述べられているにもかかわらず、今回の分析結果では、積極的自尊感情に分類された。これは、日本人の謙虚の美德の価値観からみると「自分には自慢できるところはあまりない」という表現はむしろ好ましい価値ある態度であると受け止められていることを示していると考えられる。自己感情には、こうした文化的な価値観も反映されているとみられる。遠藤・井上・篠（1992）によれば、「自己感情は、自分をこれでよいと感じることを意味する。必ずしも自分を他の人々よりよいと考えているわけではない。しかし、言い換えれば、自尊感情は真実であると感じているのではなく、むしろ成長や改善の期待や限界を知っていることを意味している。それに対して、自尊感情が高いということは自己を否定し、自分を軽蔑し、自分を観察しているということを意味している」という。

積極的自己感情に影響を及ぼす要因 30歳未満と30歳以上の層に分け、積極的自己感情を従属変数、年齢、現在の結婚状況（未婚・既婚）、子どもの有無、親との別居状況、初職の正規雇用・非正規雇用の別、現在の仕事の有無、離職の経験（初職継続・初職非継続）、これまでの強いストレス体験（その他除く17項目）、精神的につらいときさされた人（その他除く16項目）、生きがいを与えてくれた活動（その他除く12項目）、自己の性格特性（その他除く15項目）、人生の決定要因（4項目）
人生を生き抜く上で大切な人間力（その他を除く23項目）を独立変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った（表3）。

20代（厳密には22-29歳であるが、以下、簡便に20代と呼ば）に限定をみると、積極的自尊感情の高まる方向で影響の大きい順にあげると、「外向的性格」、「情緒的に安定した性格」と「理想を追求する性格」が順位位、「母の支え」「きょうだいの支え」となった。こうしてみると、
20代の積極的自尊感情を高める要因としては、性格要因が大きく、次いで人間関係的要因が続いているとみられる。
性格的要因のなかでももっとも影響の大きな「外向的性格」は、自己の能力を積極的にアピールしたり、肯定的なフィードバックを得ていく上での利点であると考えられる。
また、「情緒的に不安定した性格」は、外向的で活動的であることはそれなりにストレスも多いと予想されるが、情緒的に安定した性格がストレスにうまく対応し、自己肯定感を維持する上で有効に作用していると考えられる。

「理想を追求する性格」は、自己の成長を促す方向で作用と考えられる。人間関係的要因のなかでは、20代の女性にとってははやはり「母親の存在」が大きいと考えられる。それに次いでいるのが「きょうだい」である。ただしそれによっては各々「母親の存在」が大きいと考えられる。

表3 年齢区別にみた積極の自尊感情の規定要因

<table>
<thead>
<tr>
<th>予測変数</th>
<th>標準化係数(β)</th>
<th>有意水準</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>経済問題がストレス</td>
<td>-.128***</td>
<td>p&lt;.001</td>
</tr>
<tr>
<td>結婚問題がストレス</td>
<td>-.107**</td>
<td>p&lt;.01</td>
</tr>
<tr>
<td>母親の支え</td>
<td>.113**</td>
<td>p&lt;.01</td>
</tr>
<tr>
<td>きょうだいの支え</td>
<td>.095*</td>
<td>p&lt;.05</td>
</tr>
<tr>
<td>子供・親などの家族生活</td>
<td>.083*</td>
<td>p&lt;.05</td>
</tr>
<tr>
<td>スポーツ</td>
<td>.079*</td>
<td>p&lt;.05</td>
</tr>
<tr>
<td>自分自身の健康づくり</td>
<td>.081*</td>
<td>p&lt;.05</td>
</tr>
<tr>
<td>情緒的に安定した性格</td>
<td>.119**</td>
<td>p&lt;.01</td>
</tr>
<tr>
<td>情緒的に不安定な性格</td>
<td>-.154***</td>
<td>p&lt;.001</td>
</tr>
<tr>
<td>外向的性格</td>
<td>.266***</td>
<td>p&lt;.001</td>
</tr>
<tr>
<td>内向的性格</td>
<td>-.136***</td>
<td>p&lt;.001</td>
</tr>
<tr>
<td>理想を追求する</td>
<td>.119**</td>
<td>p&lt;.01</td>
</tr>
<tr>
<td>世話好きである</td>
<td>.168***</td>
<td>p&lt;.001</td>
</tr>
<tr>
<td>現実に判断する</td>
<td>.137***</td>
<td>p&lt;.001</td>
</tr>
<tr>
<td>養親に合わせようとする</td>
<td>-.109*</td>
<td>p&lt;.05</td>
</tr>
<tr>
<td>本人の努力で決まる</td>
<td>-.102**</td>
<td>p&lt;.01</td>
</tr>
<tr>
<td>運によって決まる</td>
<td>-.147***</td>
<td>p&lt;.001</td>
</tr>
<tr>
<td>希望・楽観</td>
<td>.068</td>
<td>p&lt;.05</td>
</tr>
</tbody>
</table>

R | .475 | .524 |
R² | .226 | .274 |

*** p<.001  ** p<.01  * p<.05
極めが重要となり、積極的自尊感情を高める上で、現実的な判断が求められることであろう。

これらの性格要因に比べると影響は小さいが、「結婚問題がストレス」「人生を生き抜く上で希望・楽観が大切」「子ども・親との家族生活が生きがい」「スポーツが生きがい」「自分自身の健康づくりが生きがい」などの影響が観察された、「結婚問題のストレス」は常識的な価値に基づいた自尊感情を低下させるのではないかと予想されたが、結果は逆であった。なぜ、30代では、結婚問題のストレスが積極的自尊感情を高めることにつながるのか、そのメカニズムはよくわからていないが、20代の結婚問題のストレスとは質的に違ってくるためと推測される。20代の結婚ストレスは、結婚適齢期より遅れることへの不安が大きく、それが自尊感情の低下につながる可能性を考えられる。それに対して、30代の場合には、キャリアウーマンで一定の社会的役目を果たし、積極的自尊感情の高い人の中に独身者が少なくない。その女性たちが結婚問題のストレスをかかえているがために、このような関係のかたちで表れてくるのではなく、「人生を生き抜く上で希望・楽観が大切である」というまでのないことであろう。そうした人間力が積極的自尊感情を維持する上で有効であることは想像に難しく、「子ども・親などの家族生活」「スポーツ」「自分自身の健康づくり」はいずれも生きがい要因であり、こうした生きがいをもつことは目に向かって生きる力を高め、積極的自尊感情を高める上で効果があると考えられる。

30代の積極的自尊感情を低める要因としては、大きい順に、「情緒的に不安定な性格」、「人生は本人の努力で決まる」という考え方」「内向的・内向的な性格」「経済問題がストレス」「周囲に合わせようとする性格」であった。「情緒的に不安定な性格」はストレスに余裕をもって対処することができず、ストレスの影響を受けやすい、そうした意味で、積極的自尊感情の低下を招きやすい側面がある。「内向的な性格」も「外向的な性格」のように社交的で活動的ではないため、他者の肯定的評価を得ることが少なく、積極的自尊感情の低下がやすい、「人生は本人の努力次第」「経済問題がストレス」「周囲に合わせようとする性格」などは20代と同様の傾向であり、成人期前期の積極的自尊感情を低める共通の要因と考えることができる。

積極的自尊感情に影響を及ぼす要因 同様にして、30歳未満と30歳以上の層に分けて、積極的自尊感情の規定要因について分析した（表4）。20代についてみると、積極的自尊感情を高める方向で影響の大きい順にあげると、「情緒的に安定した性格」と「子どもの有無」の二つであり、「情緒的に安定した性格」と「子どもの有無」の二つがあげられた。「情緒的に安定した性格」は成人期を通じて積極的自尊感情を高める上で重要であることが示された。積極的自尊感情を高めることで、落ち込み、うつになったりすることを防止する上で重要と考えられる。「子どもの有無」は、子どもがいる方が積極的自尊感情を高める上で影響があることを意味している。これは、子どもが存在しているか否かで、子どもが存在が大きい支えになることを示していると考えられる。

他方、20代の積極的自尊感情を低める方向で影響があるとみられるのは、大きな順に「人生を生き抜く上でユーモアが大切」「情緒的に不安定な性格」「経済問題などの生活環境のストレス」「ひとりでやるのが好きな性格」「友人・家族以外の人との交流」「先輩男性の支え」「内向的な性格」「周囲に合わせようとする性格」であった。「人生を生き抜く上でユーモアが大切」は積極的自尊感情を低める効果を示しており、ユーモアを求める若者ほど積極的自尊感情が低い傾向を示しているかかもしれない。「情緒的に不安定な性格」「内向的な性格」などはストレスの影響を受けやすく、積極的自尊感情を維持することが困難になりやすいと考えられる。「ひとりでやるのが好きな性格」や「周囲に合わせようとする性格」も他者からの承認や肯定的なフィードバックが得られにくいため、消
極的自尊感情の維持が困難になるとみられる。「住居などの生活環境のストレス」は日々のストレスがポディプロンダーのように発してくる可能性があり、極的自尊感情の低下につながるためと推測される。「友人・家族以外の人との交流が生かす」は意外な結果であった。若年女性は人間関係を通じてアイデンティティや自尊感情を形成しているとみられ、友人や家族以外の人とのつながりが必要な役割を果たしていると考えられている。しかし、このことは、極的自尊感情の低い人ほど、友人や家族以外の人とのつながりを求める傾向があるのかもしれない。また、「先輩男性の支え」の結果も同様に考えられなくなる。

他方、30代についてみると、極的自尊感情を高める要因は、大きい順に「人生は周囲の環境で決まる」「情緒的に安定した性格」「子ども有無」「自分の感情を素直に表現できる性格」「計画的に努力する性格」「誠実な性格」、「自然とのふれあいが生きがい」であった。「人生は周囲の環境で決まる」という考え方が30代のトップにたたきたのはなぜなのかよくわからない。「30代と30代」という人生には自分的一存では決められないことが多いことを認識させるようになる結果、このような人生観をもとにして、日々の生活の問題とすり合っていくことが考えられる。「子どもの有無」は20代の場合と逆に考えると、成人前期の女性の極的自尊感情を高く持続する上で重要な要因と考えられる。すなわち、「自分の感情を素直に表現できる性格」は計画的に努力する性格、「誠実な性格」は比較的影響は少ないが、30代の女性の極的自尊感情の維持にとっては重要であると考えられる。

30代の極的自尊感情を低める要因は、大きい順に、「情緒的に不安定な性格」、「内向的性質」、「夫婦関係がストレス」「職場のいじめ・ハラスメント」「人生を生き抜く上で努力が大切」「周囲に合わせようとする性格」「人生を生き抜く上で感謝が大きい」「学習活動が生きがい」であった。「情緒的に不安定な性格」「内向的性質」「周囲に合わせようとする性格」は20代と同様の結果であり、成人前期の極的自尊感情を維持する上で影響が大きいと考えられる。「夫婦間がストレス」「職場のいじめ・ハラスメント」「人生を生き抜く上で努力が大切」「人生を生き抜く上で感謝が大きい」「学習活動が生きがい」などの影響は比較的小さいが、30代の女性の極的自尊感情の維持に重要であると考えられる。すなわち、「夫婦関係がストレス」や「職場のいじめ・ハラスメント」は極的自尊感情の低下にとどまらず、暴力行為につながる恐れもあり、介入が必要になる場合もある。「人生を生き抜く上で努力が大切」「人生を生き抜く上で感謝が大切」「学習活動が生きがい」などは、女性の模範ともいうべき傾向であるが、そうした模範的な傾向の女性に自尊感情の低下がみられるという結果は明らかに失敗を示した。こうした模範的な行動傾向の裏側には、そうしたことへの反動や屈折した感情があるのかもしれない。

総合的考察

ローゼンバーグの自尊感情尺度について 東京家政大学自己分析研究会（2012）の調査報告では、ローゼンバーグの自尊感情尺度の本来の得点法で分析を行った。しかし、ローゼンバーグの自尊感情尺度に関しては2因子で構成されているとの研究があり（Carmines ら、1979：Kaplan ら、1980）。本研究でも因子分析を行ってみた。ただし2因子が抽出され、肯定的項目から構成されている因子を積極的自尊感情因子、否定的項目から構成されている因子を消極的自尊感情因子と名付けた。分析結果を総合的にみると、積極的自尊感情尺度は自己の肯定評価を積極的に行う動機づけに関係していると考えられる。また、消極的自尊感情尺度の方は自己の肯定評価を行うのを回避する自我防衛に関係していると考えられる。ただし、この2因子に関する考察については、個別の面接調査によってさらに明らかにしていく必要がある。

重回帰分析の結果は多くのことを示しているが、以下、いくつかの問題に整理して再検討してみよう。以下、この分析では、年齢をはじめ、現在の結婚状況、子どもの有無、親との別居状況、初職の正規雇用・非正規雇用の別、現在の仕事の有無、離職者の経験などを投入したが、本研究で結果が認められたのは唯一、子どもの有無であった。また、子ども有無は積極的自尊感情には関係せず、成人前期の女性の消極的自尊感情を高めることに関係していることが明らかになった。子どもをもったことによって自己の肯定評価が高まるわけではないが、否定的評価を回避する上では有効であることが示された。年齢の影響は、本研究の範囲では認められなかった。これは、20代と30代に分けて分析したため、年齢の影響が小さくなったことが考えられる。22～24歳、26～28歳、30～34歳、35～39歳に分け、年齢要因の影響を分散分析で検討した結果によると、積極的自尊感情も消極的自尊感情も年齢が高いほど増加する傾向が認められた（西村ら、2012）。Guindon（2010）によれば、自尊感情は青年期から成人中期にかけて徐々に高まり、安定性を示すようになる。なお、未婚・既婚、親の同居・別居などの影響も同様に検討された。

また、キャリア関連の初職の正規・非正規、現在の仕事の
有無、離軌状況などの影響も認められなかった。しかし、この結果をもってこれらの変数が自尊感情と無関係であると結論づけるのは早計であり、サンプルの条件を変え、さらに検討してもらう必要がある。

若い女性は、この時期、人生の役割やライフイベントにおいて大きな変化を経験する。本研究では、こうしたライフイベントの影響に関してはストレスの側面から質問しているが、今回の影響が認められたのは、「職場のいじめ・ハラスメント」「経済問題のストレス」「住居などの生活環境の問題のストレス」「結婚問題のストレス」「夫婦問題のストレス」である。このうち「経済問題のストレス」は成人前期の女性を通じての問題であり、積極的自尊感情の低下につながってくる。また、「結婚問題のストレス」は30代の積極的自尊感情を正の関係があり、やや特異的な現象と推測された。他方、「職場のいじめ・ハラスメント」「夫婦問題のストレス」「住居などの生活環境の問題のストレス」は30代に限られ、とくに「職場のいじめ・ハラスメント」「夫婦問題のストレス」は暴力問題に発展する虞もあり、場合によっては介入の必要性も考えられる。

Guindon (2010) によれば、女性は他者とのポジティブなかたちで結びつくことによって自尊感情が高まる傾向がある。そのような観点から、本研究における人間関係の影響についてみると、積極的自尊感情に影響があったのは「母親」「きょうだい」「先輩男性」のみであった。「母親」と「きょうだい」は積極的自尊感情の高まりにつながっていたが、先輩男性はむしろ積極的自尊感情を低下させるものであった。そして、これらの影響は20代に限られ、30代では認められなかった。また、消极的自尊感情においては成人前期を通じての影響も認められなかった。

Guindon (2010) によれば、若い女性の場合には、恋人や配偶者などの人間関係の影響が予想されるが、本研究では、意外と少なかった。もとより、本研究の結果をもって一般化することはできない。さらなる検証が必要である。

また、本研究では、若い女性を支える人間関係だけでなく、若い女性に生きがいを与える活動の面からも自尊感情への影響について検討した。積極的自尊感情の面では、「子ども・親などの家族生活」「スポーツ」「自分自身の健康づくり」などが30代において積極的自尊感情を高める効果があることが示された。また、消极的自尊感情の面では、30代において「自然とのふれあい」の有効性が認められたが、20代において「友人・家族以外の人との交流」、30代において「学習・活動」それぞれ逆効果が認められた。一見安らぎや生きがいを与えてくれそうな活動でも、義務的なものとしたり、負担となり、心から楽しめないものとなってしまう可能性もあると考えられる。

本研究では、多くの性格要因の影響が認められたが、ここでももう一度整理をしておきたい、「情緒的に安定した性格」は、成人前期を通じて、積極的自尊感情と消极的自尊感情を共に引き上げる効果が認められた。また、「理想を追求する性格」は、成人前期を通じて、積極的自尊感情を高める効果が示された。対照的に、「周囲に合わせようとする性格」は、成人前期を通じて、積極的自尊感情と消极的自尊感情を共に低下させる影響が認められた。これからの結果は、「情緒的に安定した性格」「理想を追求する性格」「周囲に合わせようとする性格」「内向的性質」などは成人前期を通じて自尊感情に影響を及ぼすと考えられる。

20代において影響が認められたのは、「外向的性格」の積極的自尊感情を高める効果、「ひとりでやるから好き」の消极的自尊感情を低める効果がそれぞれ示された。30代において影響が認められたのは、「情緒的に不安定な性格」と「内向的性格」の積極的自尊感情を低下させる効果、「世話好きな性格」と「仮想的な判断をする性格」の積極的自尊感情を高める効果、「計画的に努力する性格」及び「自分の感情を素直に表現できる性格」の消极的自尊感情を低める効果がそれぞれ示された。これらの結果は、自尊感に影響する性格要因が発達段階によって適応的に変化することを示唆しているように思われる。

人生の決定因についての考え方や人生を生き抜く上で大切な人間力もそれなりに自尊感情に影響をもつことが示された。「人生は本人の努力で決まる」という人生観は、成人前期を通じて積極的自尊感情を低下させる影響が認められた。努力してもうまくならない時代状況、社会環境の中でやや屈折した人生観が若い女性のなかにあるように思われる。「人生を生き抜く上で希望・楽観が大切」の積極的自尊感情を高める効果については、積極的自尊感情を維持する上で希望をもつことが重要であることを示していると考えられる。しかし、「人生は運によって決まる」「人生を生き抜く上でユーモアが大切」「人生を生き抜く上で勘が大切」や「人生を生き抜く上で感謝が大切」などが自尊感情の低下につながっているという結果は、こうした考え方をしている若い女性ほど自尊感情が低くなっていることを示唆しており、問題である。今後、面接調査などにより、さらに検討していく必要がある。

謝辞

本研究では、東京家政大学自己分析研究会が総会（東京家政大学の同窓会）の協力を得て、2011年3月実施した「女子大卒業者のライフキャリアに関する意識調査」のデータを分析した。本調査の実施にあたってお世話になった東京家政大学総会の事務部の皆様、東日本大震災の被災後も定期的に貴重な回答を寄せていた総会会の皆様に心より感謝申し上げる次第である。
Abstract

In the present study, we investigated factors influencing self-esteem among graduates of women’s universities in the early stage of adulthood by conducting a questionnaire survey by mail on approximately 5,000 graduates of women’s universities in their 20s and 30s. Responses were obtained from 1,255 subjects. Survey contents included age, marital status, presence or absence of children, work history, stress, interpersonal relationships, source of motivation in life, personality traits, views on life, human qualities valued, and Rosenberg’s self-esteem scale (SES).

Factor analysis of responses on the SES revealed two factors. The first factor was named active self-esteem, while the second was named passive self-esteem. Subjects were divided by age into those in their 20s and those in their 30s, and stepwise multiple regression analysis was performed using the factor scores for each factor as dependent variables and items such as age, marital status, presence or absence of children, work history, stress, interpersonal relationships, source of motivation in life, personality traits, views on life, and human qualities valued as independent variables.

The results showed that personalities marked by emotional stability and pursuit of ideals and the presence of children were associated with increases in and maintenance of self-esteem, while personalities marked by a tendency to conform to others, introversion, the view that one’s life is determined by one’s effort, and stress related to economic problems were associated with decreases in self-esteem. These effects were seen in both subjects in their 20s and those in their 30s. There were also many variables that exerted different effects in the two groups, suggesting that factors affecting self-esteem change adaptively with developmental stage. Contrary to expectations, however, virtually no effects were seen for work history.